Are you Happy ?

S.c

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｒｅ　ｙｏｕ　Ｈａｐｐｙ　？

【Ｎコード】
Ｎ０５２３Ｐ

【作者名】
Ｓ．ｃ

【あらすじ】
「トリック・オア・トリート！」
そんなことを言った彼女は笑んでいる。。。

§1　悪戯⇒？

僕らの前にそびえる、三階建ての校舎。
半年前から続いているある問題に悩まされている先生たちは生徒に挨拶しながらも浮かばれない顔色だ。
僕の通う中学の校門に入ってすぐ、背後からの声が横から飛び出してきた。
「佰年坂（ひゃくねんざか）、トリックオアトリート！」
言っておくがまだハロウィンではない。
十月三十日。ハロウィンイブだ。
無論、夜迷の場合は年がら年中それを言っているのはこの半年間で分かったから月日を考える必要な無いのだろうが、やはり毎日こうもハロウィンの話をされると嫌でも意識するものなのだ。夏に『真夏のトリックオアトリート』言われたもんには映画にもならない、むしろ秋が清清しいので秋に思いをはせることで多少の冷却効果は得られたように思う。
「ハッピーハロウィン……」
どこがハッピーなんだろうね、全く。年中言ってたらから幸せの定義が分からなくなってるかもしれない。幸せってなんなんだろうね一体？
僕はそう思いながらいつものように振向く。
いつもどおり満面の笑みを浮かべた夜迷がその長髪を揺らしながら、そこにいた。朝っぱらから、校門の陰まで全速力で駆けて、隠れたという体に頬は高揚し、いたずら小僧（否、娘）が「いたずらを完了したぜ☆」と言っている風な笑みだった。僕は今日またなにをされたのだろう？　無駄と分かりつつ今日も聞く？
「今日はなんなんだ？」
「ハッピーハロウィンを言うのが十分は遅かったわね。いたずらはもう、しかけておいたから十分なリアクション宜しくっ」

人の話を聞けよ、と言いたい。奴がいたずらを仕掛けている最中に僕はハッピーハロウィンを言わなくちゃいけないのかな？　そうなのか？　あしたこそは早く来てやろうとか思っても。大体は夜迷に負けてしまうというのがいつもの僕の常である……

「あのさ、佰年坂、明日は部活遅めに来てもいいからね？　ってか遅めに来い！」

「なんで先に言うのさ？　絶対忘れるじゃん」

三歩歩いたら、頭の中がすっからかんになる男だとよく言われます。ある意味、一瞬一瞬を生きているという手本かもしれないと自“己”自賛をしてみる。まあ、あるわけないけど。

「大事なことだから帰るときにももう一回言うの！　分かった？　分かった？」

「大事なことだから二度言いました……か。面白いな」

「んー。そこは真面目につっこまれるとなんともいえないわね。むしろ、二百回は言うべきとか言う返しはなかったかしら？」

「無いし……お前だけそうしてろよ」

「分かった、分かった、分かったかける百九十八！」

うむ、半年付き合ってノリがよく分からん。ってか、よけい、分からなくなっている気もある……

朝のホームルームの読書の時間、僕と夜迷は同じ本を国語研究会（略して国研、部員二名。部員募集……はしてない）として読んでいる。ただそれは難しい本でなく、楽しめるもの、例を挙げるとラノベなど要するにエンターテイメント作品も可能とされる、サリンジャーの「ライ麦畑で捕まえて」なんかはそんな要素が強いというけどそこら辺はどうなのだろう？　小説における娯楽作品と、一般文芸の違いを一考するのも一興だろう。今週の課題図書は海外のＳＦ大家のミステリーシリーズだったりする。英語文法の言葉遊び、現代で言うと西尾維新や清涼院流水のように語感や、アナグラム、をこだわっているため、日本語では魅力の半分も理解できないと夜迷は言っていた。

夜迷は僕の斜め前方にいる。たいした、わけもなくその背を見ていたら、急に振向かれて視線がかち合った。まだ気付かないのかい？　という風に微笑む彼女。周りの生徒たちは高校受験が近いこともあり勉学にいそしんでいたので、それに気付かない。

なにが？　とアイコンタクト。

はあー？　と疲れたように肩を竦められた。いたずらのしがいがないじゃない、とでも言いたげだった。というか言っていた、間違いなくアレは。

鈍感力の塊ね。と呆れられた。それは違う気がする。

そんなことない、塊よ……となにかを滲ませて否定。

そして、継ぎ目なく一時限目の授業が始まり、僕は机の中に手を入れようとした……が入らなかった。教科書がいっぱいで取り出せないというわけでもなく、ただただそこには金属の壁がその反対側の開放口と対を成すように鎮座してなさっていたのだった。

……

§2　一時限目

「バカだねぇ？」
「お前がバカだろ？　あんなの中学生がするいたずらじゃねーよ、バカ」
「そんなこと言って～。置き勉してなかったら朝、机に教科書入れるとき普通気付くでしょ？普段教科書を持って帰らないあなたが悪いのよ、バカね」
「バカ言うな、これでも成績は結構いいほうだ」
「じゃあ、霧影に入れるくらいかしら？」
「入れるんじゃないか？　この前の模試でも合格圏だったし」
「そう、実はあたしも霧影高校なんだよね。今度は同じクラスにならなかったらいいのにね」
「全く、それに関しては僕も全面同意だな」
「ひどいね……そんなことないとか普通言うんじゃない？」
「知るか、んなもん」
「じゃ……じゃあ、知っとけ。この、ばーか」
一時限目と二時限目の間の休憩。校門の前で見せたのと同じ、満足そうな笑みをはにかみながら夜迷は見せ付けた。僕が夜迷のささやかな悪戯を許容しているのはひとえにこの笑顔のせいもあるだろう。余りにも日常的な日常。慣性がついたはずみ車は止まることなく、ささいな幸福を安定して僕に与えてくれるのだ。
――――だが、それは現在の状況に甘んじた、僕の軽率な考えだ。日常になってはならないのだと夜迷が決心していることも知らない、僕の浅はかな感傷……――――
一時限目の評価
夜迷　彩音……○
悪戯　　……△（在り来りでした）

§2　一時限目（後書き）

よいしょっと、まとめて更新だっ☆ミ

他の作品も宜しく／

http://ncode.syosetu.com/n5543m/

http://ncode.syosetu.com/n5943n/

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0523p/

Are you Happy ?

2010年12月16日03時10分発行